授業特別協力者（ゲストスピーカー）報告書

テーマ　：　東日本大震災後の、女川向学館の歩み
授業特別協力者名　：　芳岡　孝将 氏　（女川向学館　マネージャー）
実施日時　：　2022 年 6 月 3 日（金）　1 時限
担当教員名　：　中村　亨
授業科目名　：　ベーシック演習Ⅰ
履修者数　：　12 名

実施結果
＜女川向学館は宮城県女川町で NPO によって運営されているアフタースクールである。Zoomで教室とその女川向学館をつなぎ向学館マネージャーの芳岡孝将さんとアドバイザーの佐藤敏郎さんのお話をうかがった。お話の後は活発な質疑応答が行われた。以下は受講生による二人のお話のまとめである。＞

「ガレキに種をまこう。それは塩水をかぶったガレキかもしれない。でも、種がないと何も始まらない。」

津波で 8 割が流された町、女川。私たちは、その町に種をまいたお 2 人、佐藤敏郎さんと芳岡孝将さんにお話を伺った。

お 1 人目は、震災当時中学校教諭で、現在は女川向学館アドバイザーや「大川伝承の会」などで活動をされている佐藤敏郎さん。お話は、震災直後、学校の教壇に立つエピソードから始まった。

女川の人は、もれなく全員が家族や親戚、親しい人を亡くしている。その子供たちをどのように震災に向き合わせるのか。当初は、校長先生らとも意見が合わないこともあったという。

「校長たちがやろうと言った、震災の俳句作りの授業。私は反対でした。子供たちにはまだ辛いのではないかと。なので、『イヤだったらやらなくてもいいんだぞ』と生徒たちに告げてから、開始の合図をしました。その瞬間の生徒たちの表情は今でも忘れられません。ひとり残らず、全員が真剣な顔で 575 を作り始めたのです。夏休みの読書感想文すら出さないあの子たちが。」

女川は 今何色に 見えますか

逢いたくて でも会えなくて 逢いたくて

みあげれば がれきの上に こいのぼり

生徒たちが書き上げた 17 音。私たちの心を打つだけでなく、生徒たち自身の心をも変えていったという。

「17 音という少ない言葉だから、辛いこと全てを語らなくてもいい。そして、キャッチーだから周りの子と気持ちを共有しやすい。子供たちは、それまで失っていた言葉を、俳句を通して取り戻したんです。」と、佐藤さんは語る。

防災とは、「あの日」を語り、「未来」を語ること。小さい声でもいい、自分のペースで、いろんな角度から、語ってみよう。動いてみよう。そんな風に、中学生たちは変わり始めた。それが、女川では「いのちの石碑プロジェクト」として、東松島では「16 歳の語り部」として形になった。下を向いていた女川の中学生たちは、上をみあげて「未来」を語るようになった。

お 2 人目が、女川向学館の拠点長をされている芳岡孝将さん。アフリカで活動中に震災が発生し、帰国後に「自分が東北でなにかできることはないか」と探した末に出会った女川向学館にご入職された。この春からは、NPO カタリバから独立して向学館を運営されている。

「仮設住宅前で寝そべって宿題をせざるを得ない子供を見たのがきっかけだったようです。」と、芳岡さんは語り出す。女川向学館は、「震災があったから夢を諦めた」という子供たちがいないように、放課後の学び場であり居場所である場所を作ろう、と設立されたアフタースクールだ。小中学生に限っては、町内の半数以上の子供たちが利用している。

「子供たちにとって向学館のスタッフが、大人のようなタテの関係とも友達のようなヨコの関係とも違う、『ナナメの関係』であることを大事にしました。」と芳岡さん。

「向学館がなかったら、前を向けなかったと思う。」

「向学館の人になら、なんでも話せる。」

そんな子供たちの声を多くご紹介いただいた。被災した子供たちに必要なのは、単なる学習塾ではない。孤独を抱えたその子たちを蘇らせたのは、芳岡さんはじめ、いつも子供たちに寄り添うスタッフさんのいる向学館という居場所だったのだ。

「未来は、過去と今が積み重なって、必ずやってくる。それはずっと先のことかもしれないが、それでも必ずやってくる。私たちは、進まないといけないんです。」

最後に、佐藤さんが語りかける。

佐藤さんと芳岡さんをはじめ色々な人が汗を流して種をまいたこの女川で、中学校の授業を通して、あるいは向学館という居場所を通して、子供たちは上を向く。

そのみあげた先には、生まれ変わった女川の空をこいのぼりが泳いでいることだろう。
（執筆者：受講生　佐野　奏太）